

「仙台藩は賊軍に非ず 戊辰戦争と仙台藩」

平成30年7月27日

仙台郷土研究会会員 木村紀夫

幕末 主な藩の動向

朝廷	攘夷	開国	公武合体					
幕府		開国	公武合体			大政奉還		朝敵
会津藩		開国	公武合体	京都守護職	長州征伐戦・ <u>官軍</u>			朝敵
庄内藩		開国	公武合体		江戸市中取締役			朝敵
仙台藩		開国	公武合体		列藩同盟結成			朝敵
米沢藩		開国	公武合体					
薩摩藩		開国	公武合体	会津協調	薩英戦争	倒幕提携		<u>官軍</u>
長州藩		開国	公武合体	過激攘夷・ <u>朝敵</u>	四国戦争・長州戦争	倒幕提携		<u>官軍</u>

攘夷・倒幕運動過激派

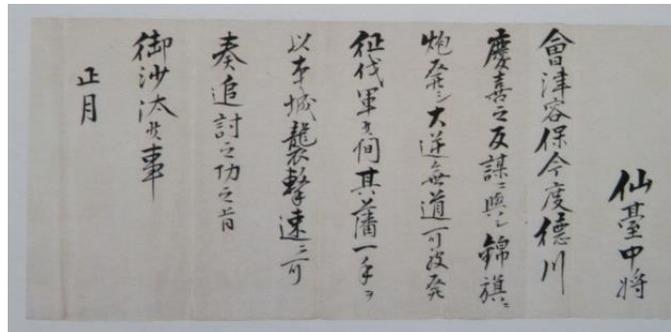
長州藩	吉田松陰、久坂玄瑞、高杉晋作、桂小五郎(木戸孝允)
薩摩藩	小松帯刀、西郷隆盛、大久保利通
急進派公家	三条実美、岩倉具視

1、仙台藩の和平工作

慶応4年1月3日(1868)、新政府から挑発された旧幕府側は「討薩の表」を天皇に奉じるため、幕府軍、会津、桑名藩など一万の兵が大坂から京都に向かった。鳥羽・伏見の関門で待ち構えていた薩長軍5千余兵が発砲し戦闘が始まる。当初互角の戦いであったが、偽造した錦旗や仁和寺宮親王を登場させるなど、天皇の権威を利用して薩長軍は朝廷の軍・官軍となったので、徳川慶喜は戦意を失い江戸へ逃亡し旧幕軍は敗退した。

新政府の実権を握った薩長は徳川家と会津藩を朝敵として、西郷隆盛ら率いる征討軍が関東方面で武力討伐戦を強行し、4月11日には江戸城を接收し、265年間戦争のない平和と豊かさを誇ってきた江戸幕府を壊滅させた。

さる1月17日、仙台藩主名代の但木土佐は、錦旗に発砲した会津藩を仙台一藩で征討するよう藩主伊達慶邦宛の朝命を受けた。しかし京都守護職として5年間も朝廷を守り、孝明天皇の信頼厚かった会津藩に朝敵とされる理由はなく、慶邦は薩長の恨みによる私怨戦であり、征討戦は大義がないとして、会津藩救解のために自ら和平工作に立ち上がった。



仙台藩は、和平交渉を粘り強く進める一方、肥後・肥前・加賀など雄藩と連合を協議するなどして、奥羽での戦争を避ける努力を重ねた。

建白書の奉上

「倒幕五不可の建白書」を2月11日作成し(大槻磐溪起案)、大条孫三郎を使者として上洛させたが東征軍は既に出陣した後で渡せなかった。次いで正使佐々備中を、3月には「討会不可の建白書」を伊達将監、遠藤主税が征討総督府へ、5月には坂英力が太政官建白書を。何れも取り上げられず不調に終わる。

『仙台市史』によると「倒幕五不可の建白書」は5つの疑問点を挙げて、京都政府の追討軍派遣を批判し、慶喜の処分と会津征討の再検討を求め、理を立てて異議申し立てをした。これは他藩には見られず、明快な正論で仙台藩のゆるぎない主張となる。イ、開戦のきっかけの発砲は薩摩・長州側と幕府側のどちらか。薩摩の伏兵からではないのか。ロ、大政奉還後の徳川慶喜に謀反の意思があるかどうか。ハ、王政復古に期待する万民を苦しめる戦争が幼帝の決定であるのか。二、謹慎の態度をとる慶喜に長州と同じ寛大の措置を与えよ。ホ、内乱に乗じた外夷の干渉を受け世界に国辱をさらすのでは。

仙台藩13代藩主伊達慶邦



2、奥羽越戊辰戦争に突入

しかし会津藩と庄内藩への報復戦争に狂奔する薩長政権は、奥羽越に大軍で押し寄せてきた。表面では征討戦を掲げているが、奥羽からの賠償金で出兵藩への賞典、報奨金を確保するため、奥羽を徹底的に打ちのめし軍事占領を期していたとしか思えない。

さらに乏しい新政府の予算を確保するため、奥羽の金・銀・銅・鉄・鉛など豊富な地下資源と、海外との交易で最も外貨を稼いでいる奥州生糸を奪取する、経済戦争の面が強くあった。

したがって会津藩主がひたすら恭順し、仙台、米沢藩主など奥羽諸藩がいかに誠意を尽くして和平の努力をしても一顧だされず、決戦は避けられないものとなっていた。

同盟は閏4月11日の「白石会議」で、会津救済の歎願書が認められない時は征討軍と戦うことを決している。17日拒否され、19日同盟は会津藩・庄内藩征討の軍勢を解兵し政府軍との対決姿勢に入った。

奥羽鎮撫府下参謀世良修蔵の発した密書が発覚し、閏4月20日福島で瀬上主膳が指揮して誅殺する。「奥羽皆敵ト見テ坂田沖ニ軍監オ回シ挾撃之大策ニ致度候・トクニ米沢、仙台藩ノ朝廷ヲ軽シル腹ノ底ハ片時モ油断デキズ・江戸へ急行シ西郷様へモ談ジタ上、発京シテ大挙ノ計ヲ定メル」。

慶邦は天皇を政権争いに巻き込んでではなく、天皇を政治利用してはならないとの信念を強く持っていた。そのため薩長を朝廷から除き、「真の朝廷政権実現」と「会津を守るため」白石会議を経て、5月6日、奥羽と北越の31藩は「奥羽越列藩同盟」を結成し、大義のため防衛戦争へと立ち上がった。薩摩藩の藩閥専横政治甚だしく、各地の有力大名から批判が噴出していた。

3、仙台藩出陣

仙台藩は総勢1万3400人余の大軍は、奥羽諸藩の要請に応え援軍を派遣し、そして国境防衛とおよそ23の主戦場で最後まで戦い抜いた。

征討軍	陸路	白河__棚倉__三春__二本松__母成峠→	越後口→	会津征討
征討軍	海路	平潟__泉__小名浜__湯長谷__平__相馬__駒ヶ嶺__旗巻峠→		仙台征討
閏4月20日		白河口戦争	100日に及び	援軍 2000人
閏4月28日		北越戦争	援軍中津山楽兵隊15歳の少年兵20人ふくめ	援軍 300人

6月16日	平潟口戦争	征討軍1500人平潟港上陸し数万兵に	援軍 1500人
7月 4日	秋田戦争	秋田藩脱盟、同盟軍との戦い9月まで、	援軍 3000人
7月29日	二本松戦争	征討軍7千人に攻められ8月末落城	援軍 900人
8月 7日	駒ヶ嶺・旗巻峠・筆甫国境激戦	1ヶ月、9月11日陥落	出兵 3800人
23日	会津戦争	征討軍70藩5万人、籠城1ヶ月	援軍 100人
2年4月20日	箱館戦争	額兵隊・見國隊奮戦、5月18日五稜郭落城	脱藩兵 610人

仙台藩 他藩への援軍8400人 仙台藩境戦 3800人 他城下警備



輪王寺宮

7月、宮は滞在されていた会津から仙台に入られた。12日白石城を公議府として着陣し、総裁となって列藩同盟軍を指揮される。

宮は薩長の身勝手な独走に絶望し、列藩同盟に「薩長賊が幼君明治天皇を操る君側の奸で…勤王を守るためこれを討伐せよ」と『令旨』を賜り、さらに全国の10万石以上の大名に対し『日光宮同座布告文』を発した。



堤焼の砲弾と、木製の大砲
(仙台市博物館)

仙台藩の出陣状況

(仙台藩では拠所を番所と称した)

藩主伊達慶邦 四月白石
 嗣子伊達宗教 七月相馬口駒ヶ嶺、中村、木戸、弁天坂、熊川
 一関藩主田村邦栄隊 四月白石、五月藩境唐丹警備、七月秋田
 秋保助大夫隊 田田 七月秋田
 秋保豊盛隊 長袋 二口峠警備 秋田
 姉盧武之進隊 金成 四月会津土湯口、五月白河
 鮎貝太郎平隊 松崎 四月会津御霊櫃口、八月旗巻峠
 石川邦光隊 角田 四月湯原口、五月白河、須賀川、六月矢次、七月磐城二本松、九月筆甫
 石田正親隊 大松 四月会津、八月駒ヶ嶺
 石母田備後隊 高清水 会津湯原口、七月磐城平、八月駒ヶ嶺、秋田
 石母田但馬隊 櫻目 四月仙台北城下警備、六月磐城木戸、福島軍務局
 泉田志摩隊 薄衣 四月仙台北城下警備、五月白河、七月二本松、八月駒ヶ嶺
 氏家清庸隊 下中目 四月会津、五月白河、七月二本松
 遠藤文七郎隊 川口 閏四月秋田藩境警備、七月秋田藩境、八月秋田
 大内城後隊 西郡 五月九条総督警備、七月相馬口
 太田新六郎隊 中村 四月仙台北城下警備
 大立目教篤隊 飯野川 八月駒ヶ嶺、九月旗巻
 大町因幡隊 金ヶ崎 四月岩沼で奥州府警備、五月白石、桑折、二本松、郡山と進軍
 大松瀧掃部の輔隊大松澤 四月会津石庭口、五月白河、八月駒ヶ嶺
 奥山永之進隊 藤沢 四月仙台北城下警備、会津中山口、七月二本松、八月駒ヶ嶺
 奥山十之進隊 小野田 藩境番所警備 四月会津中山口、八月駒ヶ嶺
 笠原中務隊 石森 七月相馬口木戸
 片倉小十郎隊 白石 四月越河口、五月白河、七月藩境越河警備
 片平大丞隊 村田 四月仙台北城下警備 五月白河、八月相馬口
 上遠野秀宣隊 大川口 五月白河、七月秋田
 黒木兵庫隊 照越 仙台北部地域を警備
 黒澤俊親隊 中津山 七月長岡、八月駒ヶ嶺
 木幡松三郎隊 孫沢 五月白河、*直清 七月相馬口、八月駒ヶ嶺
 小梁川盛国隊 野手崎 閏四月白石、五月富山陣屋警備
 坂英力指揮 黄海 四月白石本営、閏四月福島軍事局、七月白河、二本松、
 佐々雅樂隊 丸森 四月会津、瑞鳳寺の守護、五月二本松、六月白河、八月筆甫
 佐藤宮内隊 小斎 四月国見、五月白河、七月須賀川、八月旗巻峠
 塩森左馬介隊 若柳 二月寒風沢番所警備、五月白河、七月棚倉、本宮、八月駒ヶ嶺
 柴田中務隊 船岡 大年寺警備、六月小名浜、七月熊川、秋田
 芝多寶三郎隊 谷地森 二月藩境番所警備 五月白河
 白河邦親隊 真坂 五月白河、六月棚倉、七月秋田
 瀬上主膳隊 鹿又 四月会津土湯口、五月白河、七月秋田

高泉兼之隊 米谷 石巻海岸警備、六月磐城、七月磐城七本松、八月駒ヶ嶺、九月旗巻峠
 高城左衛門隊 小舟越 三月会津湯原口、六月白河、八月駒ヶ嶺
 高野(虎甘)隊平沢 六月磐城、八月駒ヶ嶺
 武田安之助隊 和淵 七月相馬口
 只野敬之助隊 中新田 一月軽井沢番所警備 閏四月田代口番所警備
 伊達安芸隊 涌谷 四月会津中山口、五月白河、七月二本松、秋田
 伊達邦賢隊 川崎 三月笹谷口警備、五月白河、六月小名浜
 伊達藤五郎隊 亙理 四月会津湯原口、七月相馬口、八月駒ヶ嶺
 伊達邦直隊 岩出山 一月藩境番所警備、四月湯原口、閏四月尿前警備、六月金山、七月秋田
 伊達筑前隊 登米 三月会津御霊櫃口、五月白河、七月棚倉、本宮、八月駒ヶ嶺
 伊達邦規隊 岩谷堂 四月仙台北城下警備、会津、七月秋田
 伊達将監隊 水沢 二月藩境番所、四月仙台北城下警備、閏四月二口峠、六月白河、八月秋田
 伊達宗廣隊 宮床 四月白石、閏四月天童、作並口警備、七月相馬口、八月駒ヶ嶺
 戸田陸奥隊 大衡 七月相馬口、八月駒ヶ嶺、九月旗巻峠
 富田小五郎隊 小野 四月清川、六月小名浜、
 中島信成隊 金山 六月磐城口、七月湯本、八月駒ヶ嶺、旗巻峠
 中島外記隊 上口内 四月会津、閏四月福島、五月白河、
 長沼致季隊 官沢 四月会津湯原、福島、五月二本松、八月藤田
 中村宗三郎隊 岩ヶ崎 四月白石本営、八月秋田
 沼辺梓之助隊 人首 出兵
 布施備前隊 柳津 四月仙台北城下警備、閏四月東名浜警備、七月本宮、二本松、八月相馬口
 古内可守隊 宮崎 二月藩境番所警備 七月相馬口、中村、八月金山口
 古内広直隊 岩沼 五月白河、七月相馬口、八月駒ヶ嶺
 松岡主水隊 白川内親 八月駒ヶ嶺
 松前広弘隊 清水沢 四月会津
 眞山倫輔隊 下折壁 四月会津、六月気仙縷里海防、八月丸森国境、九月旗巻峠
 三澤邦為隊 前澤 四月仙台北城下警備、会津米沢口、八月秋田
 宮内長十郎隊 駒ヶ嶺 八月駒ヶ嶺
 村田松之進隊 永井 四月仙台北城下警備、会津越河口
 茂庭郡方隊 松山 三月仙台北城下、四月塩釜、会津湯原口、七月平、八月駒ヶ嶺・御殿山
 梁川藩審隊 鶯沢 七月金山、
 亙理陸奥隊 佐沼 七月秋田
 和田織部隊 蒲生 三月会津御霊櫃口、宮戸島など海岸防備

仙台藩は総勢一万三四〇〇人余の大軍を、国境防衛と奥羽諸藩の要請に応えおよそ二十三の主戦場に援軍を派遣して戦い抜いた。

4、会津藩士渋谷源蔵の記録『雪冕一弁』明治39年（福島県立博物館学芸員 阿部綾子氏読下し）

会津藩の慢心 第二節「上位論 京都守護職 長人禁入京」より

（会津藩の活躍により）多くの臣属中には或は浅慮さんりょの者有て、之に乗して慢心を起し、権威を張り募て他藩士を視ること土芥どかいの如くなる挙動無きに非ず、然らぬたに妬忌ときを懐く所の各藩士、或は我藩士を蛇蝎視だかつて恨みを含む者有しと聞く、是全く我藩尚武の流弊久く、文学に暗き者多きか致す所に出て、識者の謗りを免れざる所にして歎惜の至、後年の禍原を招きたる一端とは成りたるなるへく、実に当時の一失事とも云ふべき也

列藩同盟成立 第九節「東北方面 奥羽合従」より

閏四月二十日、奥羽列藩の重役白石に会して奥羽同盟を約す、蓋総督府より会津降伏の歎願書を卻しりぞけるに当たりて朝敵不可容天地云々の語有、衆皆望を失ひ、其処置公明正大ならず、九条総督の意向と全く反対の指令を受るに至りて始て薩長の奴輩どはい名を皇師に仮て私怨を晴さんとするに非やの疑ひ、世良の密書を得て之を確認するに至り、大に怒て曰、何ぞ奴輩の爪牙そうがと成て其悪を助長せしむへけんや、正義公道に依て奸徒を掃蕩し忠を朝廷に尽すへしと衆議即一決して列藩同盟を約し盟役書に調印せり

会津の事情 第十一節「若松籠城并封境内」より

参謀の長人世良修蔵か肯せざるより下命書に会津は不可容天地朝敵故沙汰に及難しとの文に仙人大に怒て世良を斬殺し、是より各藩白石に会して同盟を結び、我蕃を援て君側の姦邪を除き、二国の民を安するとの契約成りたり、事は前九節に詳也、会津藩君臣之を聞くや、謝罪の術は百方手を尽くしたるのみならず、仙米二侯の懇情を徒事に帰したる上は決戦の他無きに至りし也と急に東西南に各隊の兵を分発〔事は前七節に詳也〕して数月間三方の大戦となりしも、戦遂に利あらず、八月廿二日東境石筵口守を失ひしより敵兵空入ほんにゆう、直ちに猪苗代を衝く

開城帰順までの藩論 第十二節「開城帰順」より

同盟の主唱なる米沢藩は早くも叛そむいて敵に下り、直ちに先鋒に差向けられて若松城に敵するに至ては、厚顔奴輩どはいも心苦にや迫りけん、九月始より屢密使を通し、順逆を説き、降を勧めて已ます、是に至て城中一擬固の人心始て動き議論二派となり、其一は、此期に臨て卑怯未練なる降参とは何事ぞ、今こそは矢玉尽き刀鋒の折る、迄力戦し、君臣城を枕とし、社稷しゃしよくと共に斃れて藩祖以来の武名を汚すへからず、冤名の如きは自ら排明の時なからんやと傲言して止まざる有、一は言ふ、武運拙く此極に至たるは命也、懺うらむへきは勢ひ皇師に抗するに至りたる今日、仮令武門の胆を張て一時の介節を遂るも、永世汚名に沈て万古青史を穢さんこそ恥辱の大なるものあれ、然は一たひ膝を屈するの勝るに如かすと、茲に君公に在ては、一人恥を忍ひ数万の生霊を助命せしめ祖先の祀を存して回天の時を待へし、との命に一決せしも、猶心腹せざる者少からさる中にも、気節高き一学士秋山左衛門は一通の諫書かんしょを上り自刃して死したるそ雄々しき

（注 小文字のふりがなは木村が付した）

5、降伏

奥羽諸藩は敗勢となって米沢藩は9月4日降伏し、15日仙台藩が降伏、会津藩は22日降伏、25日には盛岡藩、27日には庄内藩、村上藩と奥羽の諸藩すべてが降伏した。

列藩同盟の敗因

- 0 6月16日平潟港、7月25日新潟太夫浜に征討軍艦が入港、海路から重兵器と大軍を大量輸送し征討軍がぜん優勢に。再々要請すれど旧幕府艦隊江戸湾動かず、奥羽越唯一の兵器輸入港新潟を封鎖される、海軍力。
- 0 大坂冬の陣以来253年間戦争経験無し。薩長両藩は長州征討戦争と薩英戦争・英米仏蘭四国との戦争で外国との近代戦を経験し、洋式銃砲を大量に導入、洋式に軍制・作戦・指揮・伝達・訓練・兵站
- 0 同盟に近代戦争の経験を積んだ指揮官おらず、全軍の統一作戦立たず機能的作戦展開できず
- 0 7月秋田藩の同盟離脱、南と北から征討軍との二正面に戦線が拡大し仙台藩の戦力を三分される(白河・磐城戦線4400兵、秋田戦線3000兵の援軍)、自藩国境戦には僅か3800兵しか配せず。庄内、盛岡、一関藩は秋田戦に兵力を向け、諸口での同盟軍の戦力低下と士気の喪失生じる
- 0 米沢藩の反対で軍事主導権仙台藩から「諸藩の衆議」に変わり、指揮権があいまい会津藩主も憂慮閏4月22日『白石盟約書』「大事件は列藩尽衆議、可帰公平之旨、軍事之機会、細微之節目等ニ至候テハ、及衆議、可随大国号令事」。5月2日『仙台盟約書』「過日白石ニ於テ同盟書起草、小国可随大国ノ文辞、是亦暴慢ノ至…」、「大事件列藩集議可帰公平之旨、細微則可随其事」

6、各藩の戦死者

仙台藩1207人、会津藩2973人、米沢藩296人、二本松藩344人、庄内藩 330人、盛岡藩 153人、秋田藩 454人、長岡藩324人、薩摩藩 633人、長州藩 700人、土佐藩 130人、佐賀藩 75人、幕府側戦死者8625人(内同盟側6575人)、政府側戦死者4947人

「戊辰戦争殉難藩士弔魂碑」 明治10年弔魂碑建立 仙台市経が峯の瑞鳳殿
「戊辰之乱仙台士民為本藩致命 四方者無慮一千人卒 今建一碑於祖廟之側以弔其魂冥々之中庶乎其有一所慰為

明治十年十月 従五位伊達宗基 建」



7. 戦い敗れて

新政府の薩長は天皇の名を借り、何事も為し得るという風潮を作り藩利私欲に。

0薩長は「勅令」により「教育、警察、軍隊」については、議会の審議を経ずに天皇から直接発布されるようにして、専横政治を思うままにする

0仙台藩は62万石が28万石となり、藩士3万3千中(家族16万人)2万7千家に帰農を命ずる

新政府は秩禄処分(武士をなくし公債を与えた＝家禄補償)で仙台には一人当たり271円と、全国平均の548円とは不当に少ない大差をつけ、更に多額の賠償金を課した

0地租改正で東北の査定は特に厳しく農民は手痛い打撃を受け塗炭の苦しみ、こんなはずではなかったと新政府反対一揆が各所に蜂起し士族を巻き込み民権運動に繋がっていった

0山林の大半を国有林に取られ宮城66%秋田94%青森90%が官有林に(奈良0, 3%、西側同様)、入会権・草刈権も否認され飼料や肥料が取れず耕地は荒れ東北大凶作、泣く泣く子女の人身売買に

0「富国は西へ強兵は東へ」国の開発予算は西へ行き、維新後100年余大変な差別が生じた

- 06年「廢城令」が、敗者奥羽越の城には厳格に適用されことごとく取り壊された
- 0千数百人の戦死者と、明治2年「仙台騒擾」で玉虫等7人切腹、葦名ら57人が入獄追放され、戦後の再建に立つ有能な人材枯渇。藩士達は破産者となり事業を起こす力も社会資本も無く苦難を極めた
- 0 東北人は日清、日露以来どの戦争でも弾除けとして最前線に立たされてきている
- 0 原発の85%は賊軍とされた地域にある
- 0 政宗の居城若林城は宮城刑務所に。駿府城、山形城など幾つも刑務所から公園に許されたが・・・
新政権の実権を握った木戸孝允は「会津よりも仙台藩のほうがさらに悪い」として過酷な処分を下し、
明治政府は仙台領内での公共投資はおろか工業投資を認めず、経済再起不能にする政策をとった
・・・仙台人はこの悔しさを忘れてはならない。賊軍とされた屈辱をいま雪がねば永遠に続くことになる

10、正義の戦い

戊辰戦争は日本を植民地にされまいとして、開国か攘夷かという主張の争いで始まった。

仙台藩は「天皇による政権実現のため、君側の奸である薩長を排除する」として、「会津と奥羽の平和を守る」ため列藩同盟を結成して戦った。とくに慶邦は天皇を政権争いに巻き込んでではなく、天皇を政治利用してはならないとの信念を強く持っており、これらが藩是となっていた。

さらに、仙台藩は寛文11年(1671)の伊達騒動の際、4代将軍家綱の後見人だった会津藩祖保科正之に改易の危機を救われた恩義がある。

原敬は大正6年戦没者追悼式で「国民誰が朝廷に弓をひく者あらんや。戊辰戦争は政見の異同のみ。勝てば官軍負ければ賊軍との俗謡あり、その真相を語るものなり」と。司馬遼太郎は明治の国家建設を「明治は坂の上の雲だった」というが、東北は「坂の下の雑草」として搾取され踏み続けられてきた。

大坂夏の陣から戊辰戦争までの260年余は国内の戦乱は皆無で、世界に例を見ない平和と豊かさを実現してきた。その徳川政権を明治維新というテロと軍事クーデターで薩長が倒してから、昭和20年終戦までの77年間は相次ぐ戦争に明け暮れ日本は焦土と化した。

多くの犠牲を強いた戊辰戦争とは一体何のためであったのだろうか。戊辰戦争が起こらなければ天皇と幕府・諸藩が進めてきた近代化「孝明維新」「慶応維新」となって、玉虫左太夫らが提唱してきた私利を捨て議論する「万機公論」となり、衆議公論による民主政治が進められ、日本は戦争と縁のないかなり違った国になっていたと思える。

仙台藩は奥羽の平和を守るために、不利な戦いであるにも関わらず多くの先人達が各地で果敢に戦った歴史は誇りであり不朽である。現在の豊かな郷土は奥羽を守るために戦い礎となった先人たちと、戦後復興への血の滲む努力をした先人によって築かれている。

仙南5郡は南部領となり亙理伊達家、白石片倉家さらに岩出山伊達家等6家5千人が、領主家ははじめ一家中で蝦夷地開拓に移住した。アイヌ1万人と和人9万人の地で、原始林を切り拓き一国にも匹敵する560万人の北海道となった。伊達邦成は開拓の功により、賊軍出身ながら民間として初めてとなる勲四等を叙勲された。さらに蝦夷地開拓の中心をなした岩出山伊達邦直・吾妻謙、亙理伊達邦成・田村顕允は、その功により北海道神宮内の開拓神社に御祭神として祀られている。

いま私たちが幸せと平和を享受できるのは、尊い先人たちの犠牲の上に築かれている。
幾多の苦難を乗り越えてきた先人と郷土の歴史は、自信と勇気を与え未来を創造する力となる。
郷土の正しい歴史を知り、郷土への自信と誇りを取り戻し、次代の若者に伝えていく義務が私たちにはある
と思える。

以上